

## 幼児期に向けて、主体性を育む保育

社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園

宮本 香、雄川 加奈子、鶴田 香

小川 聰美、坂田 朗

(子ども 若者)

### 1. 目的

私たち鎌田のびやか園の2歳児グループは、幼児期における主体性の育み・芽生えに繋げるため、乳児期に大切なことは何かを日々自問自答し保育にあたっている。

そのなかで私たちは、子ども達の自我が芽生え、主張が強くなる中、身近にいる保育者が子ども達の発信・表現する様々な想いを受け止め、認めていくこと、さらに子ども達の興味や関心ある事象との関わりを保障すると共に、子ども達の「こうしたい」「あーしたい」を実践し具現化することこそが、子ども達の主体性の育み・芽生えに繋がるのではないかと考えた。

今後、私たちの取り組みが幼児期の主体性の育ちにどの様な影響を与えていくのか、また保育内容をどう繋げていくのか考えることを目的とする。

### 2. 実践内容

- (1) 子どもの興味や関心に合わせ、遊びを提供・提案していく。
- (2) ホールと保育室内で静と動の遊びを設定し、双方の活動内容を視覚化する。また、玩具や環境を子どもが把握出来るよう明確に提示する。
- (3) 子どもの遊びを見ながら発展や展開を援助する。



### 3. 結果

経過として現在は、子どもたちの様子から心身の発達に応じた遊びを考えながら、日々保育内容を発展させているところだ。

結果、乳児期に保育者が子どもたちの様々な想い・表現を受け止め、共感する事で信頼関係が深まり、子どもたちが安心して発信が出来るようになってきている。保育者が子どもたちの「あーしたい」「こうしたい」を具現化させる経験の積み重ねが、主体性の芽生えとなる発信意欲や考える意欲に繋がっていると感じる。

### 4. 考察と今後の課題

幼児期には、仲間意識も芽生え『友だちと何がしたい』『友だちとなら何ができる』など発想の幅が広がる事で発信する意欲も高まるのではないかと考える。

保育者は引き続き、子どもたちの発信を逃さず、興味や関心がどこにあるのか日々考え、保育内容を発展させながら様々な経験が出来るよう、形にしていく必要がある。

また、子どもたちが友だちを意識する姿が見られるよ



うになってきた今、友だちと感じた事を共有することや関わりを楽しめるよう援助していきたい。



<助言者コメント>

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)

大変興味深く拝見いたしました。子どもの主体性を育むための保育の展開方法として、2歳児までの過ごし方に着目したことは、とても良い着眼点であると思いました。「主体性」という言葉を聞くと、ともすれば活動の広がりが大きくなる幼児の活動に注目が集まる傾向があります。しかし、主体性は、乳児期からの愛着形成や2歳児頃から始まる自我の萌出期の過ごし方に大きく影響されます。その意味では、今回の事例発表は他の保育者の皆さんにとっても参考になるのではないでしょうか。

特に、子どもたちの「あーしたい」、「こーしたい」を中心に据えながら、発達の連續性を考慮した取り組みには感心させられました。「あーしたい」、「こーしたい」を具現化するためには、保育者側の感受性や想像力、そして何よりも共感力が要求されます。鎌田のびやか園の保育者の皆さんには、子どもからの表現を見逃さないようにしながら、子どもの感じる心に寄り添い、そして子どもの思いを具現化するための様々なアイディアについて多面的に考えています。この一連の流れは簡単なようで実は難しく、保育者としての専門性が問われる部分でもあります。

今回の発表を拝見して、「小さなチャレンジの積み重ね」というキーワードが頭に浮かんできました。発表では、発達過程や発達の連続性を意識した保育者の適切な関わりがあって、子どもたちは次々とチャレンジしていく様子が描かれています。「遊びの発展」には、子どもたちのチャレンジの繰り返しという側面もあります。子どもたちが成功体験や失敗体験を繰り返しながら達成感を得て、そしてそれを自信へとつなげ、また新たにチャレンジへと向かう様子がとてもいいものでした。

きっと、子どもたちは達成感を得ながら、わくわくして取り組んでいるのだと思います。今後、幼児期になっての活動の広がりが楽しみです。